

2024年2月25日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「向こう岸に渡ろう」

聖書：マルコによる福音書4：35～41

イエスが嵐をしずめる物語。一つの視点で見たい。私たちがキリストを理解し、深めていく中で忘れてはならないことは、「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、…人間と同じ者になりました」（フィリピ2:6以下）ということである。であれば「嵐をしずめるイエス」よりも、何故「夕方」という危険な夜の海に「向こう岸に渡ろう」とするのか？そこに着目したい。

ガリラヤ湖の特性として湖の中央は山から振り下ろす突風がしばしばある。漁師であれば誰でも知るところ。弟子たちの多くがガリラヤ湖の元漁師であるから当然知るところ。イエスご自身も知っていたであろう。ではあえて危険を冒してまで向かう「向こう岸」とはどこなのか？次の5章1節に「一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた」とある。この「ゲラサ人の地方」とは、ユダヤ人からすれば異邦人の土地になる。その土地の人々はユダヤ人が大変嫌う豚を養い、また豚を好んで食する人々であった。ユダヤ人としては足を踏み入れたくない場所、律法からすれば汚れた場所であった。しかし「向こう岸に渡ろう」という。そこには、差別的に解釈されてしまっている律法を打ち破ろうとする、超えていこうとする決意があるのではないか。

しかし、そのイエスの決意と覚悟を知らない弟子たちにとって、この船旅は、ただただ耐え難い理不尽なものにしか思われなかったのではないか。「先生、わたしたちが溺れてもかまわないのですか。」弟子たちの心情は、あんなところに行きたくない、嵐も吹いてきたことだし、引き返した方がいいんじゃないか、というところだっただろう。

その時イエスは「眠っておられた」とあり、弟子たちの騒いでいるのが、本心からの恐れやおびえではないことをイエスは知っておられたのか。いやむしろ、この時のイエスの気持ちは、弟子たちと同じように、異邦人の土地に足を踏み入れることへのとまどいや恐れ、葛藤を感じながら、じっとその心の揺れと闘っておられたのではないか。「イエスは艫（とも）の方で（舟の後ろの方で）枕をして眠っておられた」とあるが、舟の一番後ろは、おそらくは舟の先と並んで一番揺れの激しい位置であるかと思う。一番激しい揺れを感じておられたのはイエスだった。激しい動揺、激しい葛藤と闘っておられたのは、他ならぬイエスだった、ということではないか。そう考えると、イエスが、夜中に湖を小舟で渡るという、あえて非常識な手段を選ばれたことに意味が見いだされるのではないか。（神谷）